花晨月夕

我輩從來文士に非す何ぞ所謂詩人ならん然りと雖物ゝ感してゝ則ち春蛙秋蟬猶歌あり と謂ふに非すや

花晨月夕興來て而して歌ひ歌ふて而して之を筆したる者茲に若干篇而も其竟に何等の聲調をなせる乎を知らす固より以て世に問ふへき者に非る也

頃者予か友石嶋氏新に印刷場を毛の眉橋に開く予深く之を喜び乃ち舊稿を取て氏をし

て其印刷術を試みしむ世の此の篇を繙かん者須らく氏か印刷的手腕何如と見るを要す予の詩に至ては則ち之を讀む固より可讀まさるも亦妨げず

明治己亥初夏

東都停春樓主人

集中集むる所、多くは一たび「國民新聞」及び民友社發兌「支那征伐」に掲げたるものゝ御座候。又其一篇は「大日本」に掲げたるものに候。

今皆其承諾を得てこゝに收む。

花晨月夕目次

(一) 早春の富嶽 一
(二) 夜の海邊 二
(三) 隅田川邊 五
(四) 花の向島 七
(五) 鈴か森 八
(六) 稚兒の睡 一一
(七) 英魂埋む處 一四
(八) 賤か嶽 一五
(九) 江村初夏 一八
(十) 蟇 一九
(一一) 富士野の夜嵐 一九
(一二) 宇治の柴舟 九〇
(一三) 秋の七草 九一
(一四) 薩摩琵 九二

(一五) 萩の小枝 九三
(一六) 所作淨瑠璃二曲 九五
(一七) 雨中の花 一二九
(一八) 雜詠十九首 一三九
(二〇) 秋思七首 一四五
(二一) 旭日旗 一四七
(二二) 戰塲の新年 一四八
(二三) 祖先の血 一五一
(二三) 支那海上の軍艦 一五九
(二四) 黄海の驚波 一六三
(二五) 鴨綠江上の野營 一六六
(二六) 春雨 一七三
(二七) 戀 一八〇
(二八) 草雲田崎翁を挽す 一八五
(二九) 新年 一八九
(三〇) 田家烟 一九七

花晨月夕

(一) 早春の富岳

朝日に匂ふ富士の雪、これは〳〵
とばかり更に何をか言はむ。
遠山の霞の衣色をうすみ、
雪の肌も見え渡るかな。

(明治廿四年一月)

(二) 夜の海邊

光明のもすそ地に垂れて
瑠璃の臺を拂ふなり、
夕日の渡る浦傳ひ、
音も澄み行く松の風。

梢に掛る雲の袖、
淡紫に暮れ初めり、
餘波の光り山の端に、

殘んの色香匂ふめり。

靜けき宵の幕覆ひ、
波の響も遠み行く、
沖の小島は霧がくれ、
白帆の影のほの白し。

星を染めぬく夜の幕、
見る目もあやに輝けり、
天の河原のしろかねの
砂の數は數知らず。

海の眞底に落る影
眞珠の霞、波の花、
破けたばしる宵闇に、
見ゆるは灯影か漁火か。

葦邊の苫屋さよふけて
風の音さへうら淋し、
浮き沈みやる波枕、
夢は何地を繞る覽。

髪も思もかりこもの
磯打つ波の宵々に、

夫を待つ間の窓の戸を、
あけ方近く千鳥啼く。

（明治廿四年二月）

（三）隅田川邊

隅田川邊を見渡せば、
彌生のみ空白み行く
花の雲間のほのぼのと、
かすむは春の匂ひなり。

花の盛りになりぬれば、
人の心もものどやかに、
櫻かざしつ春の日の
永きも知らで遊ぶあり。

袖の軍もかぐはしき
木の下かげを舟漕げば、
底にも花の影見へて、
みあれ棹さすところなし。

花の鱗の波につれ
春のかほりを送り來る、

水のまに〳〵舟浮けて、
花に遊ばん暮るまで。

（明治廿四年四月）

（四）花の向島

ふりかたげたる瓢簞ぶらりと、天より落ち
た乙姫さんぢやぞ。年もよし、世もよし、萬よ
し野の花見ではあい……向島の花見でご
んすと、一杯天を吸ひて、シヤン〳〵ハイホ
ウ！心の駒のくるい出て、おどけたる顔

に花一片。

瓢簞と相撲とり〳〵の花見かな

（明治廿四年四月）

（五）鈴か森

草かげの荒藺が崎の夕まぐれ、
波の花鐵鞋踏んで碎け散る。
家路にと急ぐ荷馬の鈴が森、
音に聞く驛路を此處言問ん。

海原に横ふ雲や上總安房、
蕭々と渡る蘆が根風そよぐ。
聞く此處は往昔の處刑場、
笹原や斬首こもをしきし跡。
路の邊に生ふる春草血に碧し。

旅人足を止めて回顧れば、
苔は蒸す標の石邊香一縷、
結ぼふる烟の色も無情を語る。
天荒れ地老い幾春秋や經けん、
夜か〳〵啾々啾々の聲す。

恐ろしや、嗔恚の炎ゆら〳〵と
燃へ上る身には烈火の吐息つく。
血に染みし鬢髪長く恨を曳き、
めん〳〵ろう〳〵いつの世竭きん。

實にや夢！罪も報も陽炎の
腥き風颯と蘆邊を渡り、
一叫魂消る音絶へて寂。
見渡せば、闇を劈く星一點
夕潮にゆられて落る影すごし。
嗚呼、幾夜、誰が亡魂の迷ふらん。

（明治廿四年四月）

（六）稚兒の睡

父によう似た可愛兒よ。
さすか睡氣がすや〳〵と、
可愛唇しむるわい。
坊よ好い兒ぢやをとおしう、
其睡た氣な瞼をば
母がお胸につけて寢や。
父によう似た可愛兒よ。

其すゞやかな眼の上に
いとし睡氣がさすかいな。
母ハ睡たくない程に
坊ちがお寢みとりして、
坊が傍に添ふて居る。

オヤもうお手、地に下げて
睡は眉にお坐りし、
可愛眼も閉ぢたやら、
櫻色した頰、紅の
あれ〳〵白く褪めるのは、
若しや死ぬではあるまいか。

坊よお起やれ私氣遣ひな、
怖い夢路をたゞりやるか。
喚びもゞさいで――汝が魂！
坊よ其眼をちよと開いて
母が寢の下りる樣、
これ此處一目見てたもれ。

オホ、矢ッ張りお寢かや。
お可愛ろうに搖りました。
もうよいやさしいお夢見や。
おむづからずに早う寢て、

寢覺の笑待ッて居る
母をば餘所にお爲やるな。

（明治廿四年四月）

（七）英魂埋む處

（西郷南洲の墓）

來るか〳〵と
見れば今年も
人まつかげを、
春草ばかり。

（明治廿四年五月、時に西郷來の訛傳あり）

（八）賤が嶽

旗すゝき路邊に殘る夢の跡、
浥々と葉末の露や珠を貫く。
朝嵐冴へ行く峯の松が音は、
蕭々と昔を語る聲すあり。

見渡せば山も草木も皆あ兵、
夜深けて馬に飲ふ余吾の湖。
月落ちて兜の星や天を指す。

武士の鎧の袖に置く露の
玉の緒も貫とめぬ世の亂れ。
あだし身は消なば消ぬべし散らば散れ。

晄一視、闇を劈く槍一と筋。
樹や繁し殺氣の覆ふ賤が嶽。
枚を嘶で蕭々柳が瀨を越へ、
天を仰で劔光北斗をまねく。
發矢電影晃々と散れる珠。

あら一時どッと寄せ來る鯨波の聲、
山も溪もすは炬火の影滿ぬ。

已矣堅子乃公の事を破れり、
いでや切りまくらん最後の思出。

『名はあがれ雲井にいるけき郭公』。
あぎ立つる太刀のは風や木の葉武者、
ちり〳〵と時ならなくに紅葉散る。
今日一日朝日に鎧匂ふめり。

名にし負ふ七本槍も朽果てつ、
鬼柴田今は名殘の灰許り。
吹き拂ふ嵐の音も冴ゆる世に、
武者鞋踏み破りよし峯の雪。

誰が爲に今朝は梢に掛るらん。

（明治二十四年五月）

（九）江村初夏

五月雨の晴れて行く、
空のながめのすゞしげさ。
蘆の邊につなぐ舟、
波のよるべの嬉しげさ。
ほとゝぎす待ちいで、、
名乗れる聲の樂しげさ。

（一〇）蕣

（明治二十四年六月）

村雨の降らはふれかし白露を
おきてなかめむ朝顔の花

（明治二十四年六月）

（一一）富士野の夜嵐

其一

實に世の中は飛鳥川、
昨日の淵は今日の瀬と
變るあらひか、秋の空
晴れみ晴ずみ雨涙
身は浮島か原に來ぬ。

振回り南はるかよ眺望れば、
蒼海まん〳〵として際涯しあらず。
とう〳〵と田子の浦半に立つ波や、
へん〳〵と磯にこがるゝ蛋小舟、
浮き沈みよるべ定めぬ旅の空。
ねたましや、沖の鷗のうか〳〵と

何の苦も渚に碎け散れる波。
水禽の嘴に宿かる露の身の
底事ぞ脚にひまあき我思。
綾錦春の衣を染め替へて
全盛の昔に變る墨の袖。
包み敢へす山の端もるゝ三日月の
影匂ふ遠山眉ゝ變らねど、
ほの〳〵と花の夕顔かたそむけ、
領元にこぼれ掛りし黒髪を
あら無殘煩惱のきづあ切り拂ひ、
遙々と獨り山河うち越へて、
紅の花のもすそを蹈み裂きつ、

其昔伽羅のかほりを蹴散せし
足の痕血鹽に染みし路の草、
誰が爲めにおぼろに匂ふ裾摸樣、
こし方を思ひ出せとや彌生染、
蝶鳥の名殘の色も憎らしき。
路の邊よ咲ける撫子花薄
穂に出でゝ我が亡夫が小手招く。
幻か、現か、夢か、泡沫の
あだし世にあだなる身とは知乍ら、
風や吹く溪の眞葛葉うら枯れて、
袖袂うらみがちなる夕ながめ。
辿り行き、辿りゆくての北見れば、

峰つゞき足高山のあなたまで、
年ふりし松の山木かう〳〵と
立籠めて晝も小暗き木陰道、
颯々と吹くや裾野の夕嵐。
どう〳〵と搖る梢は瀧津波、
人も身も碎けて物や思ふらん。
遠方に響くはあはれつま琴の
汗へかえる、君なつかしみ想夫戀
かあでつる昔の音にもまごふかと、
立寄りて、暫時木陰にやすらへば、
生憎し松の露やら涙やら、
衣手はいとゞ思ひに濡れまさる。

聞きしのみついに着もなれぬ旅衣、
憂きものといつの世誰か言初めし。
漫々とはてしも知らぬ道傳へ
浮雲の身は中空に迷ふらん。

女の脚の弱くとも、
夫の亡跡尋ね行く
一念爭でとまるべき。
程なくわでの里近く
此處か彼處と彷徨ひつ、
入日輝く富士の根を
見あげ見おろし我夫の

心にも似しいさきよさ。
『身も武士の妻あれや』
氣を取り直し立出でゝ
見れば、柴刈る山翁
『のうゝ暫時』と松が枝の
杖を片手に足とめて、
人は何をか夕暮の
寂しき路を一人來る
乙女の姿よく見つゝ、
墨の衣にやつせども
黛匂ふ花の面、

苔に似たる口元は、
情の鹽をこぼすかと、
様子ありげに三保の松。
『何處をあてに行く鳥の
塒に皈る野路の暮、
いぶかし人の行衛哉。』

『されば去ぬる日曾我の殿、
富士の裾野の夜嵐に
振り翳しけん松明の
消にし跡にぬでの里、
何處をそれと言問ん。

何つゝむべき我身こゝろ。』

『祐成殿のゆかりかや、
ゆかりと聞けば懐しや、
虎御前にておわすらん。
翁も昔勢子となり、
終日裾野狩り暮し
火花散せし其跡を、
遠くもあらぬかへり路
いざ諸共に吊はん。』

暮渡る荻の上風身にぞしむ

秋の野に、咲くや千草の花の露、
玉の緒の、貫きとめで散りよしを、
草深く分けてぞ袂しぼるある。
旗薄此處はかたきの館かや。
腥き血にも染みけん鬼薊
今も猶恨殘すと怖ろしゝ。
此の邊り小柴の垣は朽果てぬ。
劔影闇に碎けし跡問へば、
穰々と萩の花葉に露重し。
狄生ふるかげは五郎の夢の跡、
颯々とあたり拂ひし太刀風も
痛はしや今は下葉をよぐのみ。

君見ずや彼處の松の木陰岡、
さし招くく尾花が本が墓かとよ。
荒れ果てゝ何をしるべの草葉かげ、
訪ふものは松吹く秋の風ばかり。
斯くぞとは豫て思へど、來て見れば
中々に今は身も世もあらればこそ。
心、あらば墓邊の薄暫時が間
亡夫の影とも見へよ。一夜さは
蟋蟀の形見の音をも啼け。
尋ね來て何を手向の涙のみ、
果敢なくも言の葉草に濺ぎつゝ——
『露とのみ消にし跡を來て見れば、

『浮世ぞと思ひそめにし墨衣、尾花が末に秋風ぞ吹く。』
今はた露の何とおくらん。』

落花枝にかへらず。
流水とゞめ難し。
匆々と去る月日、
忽焉といにし人。
歎きてもまたせんすべの有るべしや。
惜みても今はた何かかへるべき。
翁は虎をいたはりて

泣き臥せし身をひき起し、
『斯くてあるべき事あらず、
いざや翁が草の庵。
假の宿の一夜さへ
他生の縁と聞くからは、
心ばかりを掬ぶ水、
せめては後世を吊ひの
兄弟のあと語りつぎ、
語り明さん。諸共に
語り給へや夜もすがら、
語り給へや明くるまで。』

其二

上

夕つく日赤澤山の秋の色
照りはゆる紅葉の錦踏み分けて、
牡鹿鳴く奥野の狩の皈り路。
風は秋鬢をあぐッて霜白く、
馬は涼天に嘶へて木の葉散る。
鐵脚蹈み落とす山の端の月。
脩鞭拂はんと欲す梢の雲。
梓弓ひくはやハ幡の山南、
秋の野の尾花葛花踏みしだき

武者鞋あさけ容赦も荒くれ男、
生れ來て物斬る外は白露の
嵐吹く夕はからぬ身にさへも、
あら可笑しなほも家路の戀しきか。
皈るさは足元はやき秋の暮。
己がじゝ晴の衣手ふりはえて、
五つ三つ離れつ群れつ行く駒の
そが中に、一際目立つ武者振を
打見れば、秋の野の摺の直垂着、
班の行縢裾高にはきなし、
春草や萌黄の裡を打ちし笠
悠々と猪頸にかぶり、只一騎、

神無月十日あまりの折も折
はら〳〵と降や時雨の一雲、

ちなみてか名も村雨と夕つ空
弓張の月毛の駒に鞍置きて、
俣野さへ二度まで投げし剛の者、
せんだんとうの弓中を握り持ち、
誰が目にもてれぞ河津の三郎と、
椎が根に已れ大見奴八幡づら
引きしぼりねらふと人い白眞弓、
發矢一聲空をきる矢叫び、
鳴呼哀れ赤澤山の露と消ぬ。
木がらしよ遠寺の鐘の誘れて

こう〳〵と諸行無常を告げ渡る。
一死して人間萬事已矣哉、
朝あ〳〵結ぶは野邊の葉露のみ。

下

定めとてあき世の中に定めある
ならひとい豫て知らぬにあらねども、
しかすがに昨日今日とは思ひきや。
衣手に宿る涙の露よりも
うたてやなもろきは人の命あり。
河津の妻はやう〳〵に

玉あす涙をし拭ひ、
左と右の膝の上、
夫のかたみの兄弟が
髪なでさすり、つぐ〳〵と
見れば見る程いたはしき。
兄一萬は早や五つ、
物の哀れも知りそめて
母の言の葉菊の露
置きまどはせる花苔、
朝風寒き秋の野に
咲かぬさきより降りかゝる。
身の憂さ辛さ白玉の

涙かがらに父が顔、
昨日に變る空合を、
身の行末は知らねども
幼な心の一筋に
世をも人をも怨みうめ、
それと涙を押し拭ふ。
小腕見るさへ中々に
いやいぢらしさまさるらん。
『幼くとても父が子ぞ、
武士の子なるぞ聞きわけて、
今日の悲しさ忘れずば、
せめては十五十三に

なりたらん日は、父上の
かたきをうちて、此母が
胸の痞の下りるやう、
未來で夫に逢ふならば
告げて無念をはらさしやう、
聞き分けたもれ兄弟』と、
言へど弟は、まだ三つの
何んぜも泣きぢ
菱れ果てたる母が顔、
常なら打まもり、
不審しげにぞさしのぞく。
乳が欲しやと岩躑躅

言はで止みなん不承顔、
いや可愛さのます鏡。
曇らぬ武士の魂を
產みつけて置く母が子よ、
早うかたきを鶏が啼く
東男の子の名に高き、
富士野の草を踏み分きて
入にし人の身の上と、
後にや思ひ知られけん。
『氣遣ひあるな母上』と、
兄一萬は顔をあげ、
流石の健氣にも
男兒の

握りつめたるやさ拳、
みはる目元の鹽にさへ
殘る姿のいとをしき。

やらんかた無き憂き歎き
同じ道にと思ひしも、
焼野の雉子夜の鶴
子故に命あがらへて、
早くも月日龍田川
紅葉流るゝ頃も過き、
芳野の里に降る雪の
消も入りたき身ながらも、

二人が爲めに憂き思ひ
色にはいづの浦の波
再び曾我に身を寄せて、
かへすに早き年月を
數へて見れば、一萬は
はや九つか、箱王も
いつか七つとあらの葉の
時雨に染むる秋とあり、
夜も長月の十三夜、
月影白き庭の面に
下り居て空をあがめやる。
あなたを指して行く雁の

打連れ立つも美し。

『我等も父、しあるならば、
心のまゝに鞍も置き
馬に打騎り勇ましく、
餘所の童を見るが如
樂しく遊び暮さんに。』

『箱王とても父まさば
弓弦食ひつる鼠首
射てやるべきを腹立たし。』

『其鼠より猶憎き
父の敵の首斬りて
二人打連れ遊びあば、

如何に嬉しき宵あらん。』

『口惜しもの』と語り合ふ、
小供心のしほらしさ。
餘所目に見やる身にさへも
左こそと想ひやられけり。

其　三

骨に徹りて忘られぬ
思ひ内にあればかや、
心の色の穂に出でゝ、
朝な夕なの遊びにも
誰をやねらひ射る弓の

やたけにはやる箱王が、
『弓にてはいかゞはし
敵の首をかくこそ』と、
抽けば玉散る小太刀風、
颯と障子を切るかげに
そら怖ろしと見る乳母、
母にそれぞとつげの櫛子、
さしうつむきて入り來るは、
屠所の歩みにあらねども
憂しと見し世の子心に、
障子破りし咎めかと、
我ならずとや夕暮の

雨なす涙せきあへず。
母は二人を近く呼び、
『殿原が祖父伊東殿、
頼朝公の若君を
殺し給ひし恨みにて
果敢なくなりし其孫と、
人や聞きなば明日の日も
はかり知られぬ露の身を、
知らでや勇む兄弟が
健氣の姿見るにつけ、
いと昔の忍ばるゝ。
ゆめな恨みそ斯く母の

叱るも同じなさけぞや。』
生存へてころ浮む瀬も
世にありそ海の磯千鳥、
迭よ心沖の波
寄せつ返しつ軒近く
立ちて手に手をとりかはし、
忍び泣く音のたへ〳〵に
窓をおとなふ松の風、
うよとや獨り響くらん。

星月夜鎌倉山に立つ霞、
桃、櫻新に開く兵馬の府。

葉や繁き木曾は滅びぬ栗津原。
時めける平家も檀の浦よ消え。
朝嵐牽土が濱邊を吹き靡き、
手よ握る六十州の春の花。
君が代を八千代と祝ふ鶴が岡、
ゆるぎなき神の社にゆふかけて、
山はさけ海はあせなん世ありとも
よしやいつ誰れ二心あら磯に、
寄せ〳〵てあみ居る猛將勇卒の
其が中に、遊藝の道うとからず、
時も時、亂平ぎし世のならひ
とりわけて覺へめでたき祐經が、

敵として何をや君にゆふしでの、
斯くぞとは思ひがけなき梶原も
磐石の重き仰せを是非も無く、
馬を驅てうち向ふ曾我の里。
誰か意はん空をきる鞭の風、
咲きもせぬ下枝の苔散らせとは。

『現か、夢か、夢ならば
さめて幾歳杉の戸に、
明け暮れかゝる白雲の
胸に思の斷間とて、
亡き吾夫と諸共に、

消も入りたき悲しさを、
今又命生存へて
何に樂のあるべきぞ。
祖先の耻を思ひ知り、
關八州にかくれ無き
伊東の家名けがすなよ。
たとひ御前に召さるとも
何恐るべき事のある。
いまはの際もいさぎよう
いひがひなしと笑はれな。』
せめて門出を送るなる
親子のゑにし朝顏の

露の乾ぬ間のあだ小袖、
大口直垂兄に着せ、
同じ野末に散る紅葉
尾上の鹿の已が身に
振棄て難き生別れ、
死に行くかと恩愛の
いづれ劣らぬ弟にも、
小袖大口とり着せて、
後にまわりつく〳〵と
これぞ姿の見をさめか、
一世一度の晴れ衣裳、
果敢なき人の身の上を、

餘所に見る目も忍び音の、
なく〳〵坐る母が前。
『只何事もさきの世の
約束事と思し召せ。
若し御歎き見るならば、
冥路の旅も中々に
さはりとならん事の憂き。
況しをさなき二人が身。』
たゞ頼めしめじか原のさしも草
下り立ちてさしも親子の別れ路を
つれなくも隔つ小柴の垣の下、
待て暫時征衣の袂風や吹く。

蕭々と見渡す木陰人の影、
行く路に形見の露や殘すらん。

潮風松吹き荒るゝ由井の濱、
磯近くよる〳〵騒ぐ波の音、
蹈みしむる鞋の痕や沙の面に
露の身の一足毎に消行くを、
知りもせぬ三途の川邊死出の山、
あの世より袂曳くかと怖ろしき
慘凄たる空の色、漠たる雲。
暮れかゝる淡墨色は敷皮の
上に早や鴉の影の落る頃。

『弓矢取る家に生れし人の身の
今此處に捨る命は惜しからず、
捨て果てゝなからん後の名ぞ惜しき。』
『故郷を立出でしより斯れとは、
豫てより覺悟せし世に殘りおし。』
『いざやとく〳〵介錯』と夕暮を
急ぐなる入相の鐘響くめり。
健氣にも西に向ひて合す手の、
をさな顔見やる目さへもくるゝかと、
振り上げし太刀を後に呼ぶ聲。
あら不思議砂の雲を蹴る蹄、
誰ぞや來る？風吹く路邊畠山！

其四

上

春の隙行く駒の道
急ぐとしにはあらなくよ、
早や幾歳を立籠る
朝の霞のひまゝに、
咲くや櫻の若木立、
曾我の十郎祐成と
何時しかはる一萬が、
りゝしき姿三日の月。
弓矢取る身と生れつゝ

時にあはざるふ甲斐なさ。
世を恨むにはあらねども、
胸よ無念のやるせなき
枕に近き鐘の聲。
結ばで静けき夢は一夜だに
箱根の山に明くる玉筐
送り迎ふる春秋を、
杉の木の間に暮るゝ年。
同じ臥どに友ちどが
母の言傳、父の文、
なさけを送る晴れ小袖、

見るに我身も父、まさば、
如何に嬉しき春衣
着つゝ友どち打群れて
遊ばんものと思ひ寢に、
積る恨みを雪の路。
朝な夕なに踏みわけて
歩みを運ぶ神垣の
あをたゝよ獨り行みつ、
何を明暮祈るかや。
頃は睦月の中の五日
賴朝公の御參詣、
綺羅を飾りし供廻り、

並居る諸將の其が中に
若し工藤もや、敵もと、
一人の僧を相具しつ、
彼や此やと問ふ人の、
いづれをそれと餘所ながら、
和田、畠山、三浦殿、
里見、梶原、其右に
すこし引退き工藤殿、
木瓜の紋あざやかに
かうの直垂色白く、
頬魂も常あらず、
これぞ日頃の敵かと

見やる恨の目の中を、
人はうれしと白雲の
心にかゝる袖經は、
豫て河津に似し兒の
鋭き眼ざし見て取れば、
それと心を沖つ波。
『河津のぬしの孤よ。
御身の父と我身とは
離れぬえにしあるが中、
よろづ心を添臥しの
父の殿よもなりかはり、
たより少き御身等が

力とあらんしるしぞや。』
心の底は銀の
胴金入りし指添に、
まことよそをふ赤木柄
赤銅作りの一振を、
贈る心の白浪間
竹菱彫りし引出もの。
欲きは己が首ぞとて
切りもしつべく思ひしも、
並居る中に只一人
なまじひの事せんよりは、
夜もこうゝとふけ渡り

水も眠れる丑みつ時、
獨り頷首きさし足し
うかゞひよれどそれぞとは
敵も用意しかすがに
よるべも波の濱千鳥。
潮の滿干を聲に知る、
東雲近き空の色、
白みて飯る道すがら、
折もあらばとねらへども、
相模の灘のさがなしや。
人々船津に出船の
忍いや〳〵の勇み聲、

渚に殘る箱王が
袖をしぼると知る人も、
波路遙けく漕がれ行く。

下

窓外月落ちて夜の風死しぬ。
沈々たる一間に燈かすか。
誰ぞや晃々と劍を拔いて看るゝ、
半宵天を睨んで感慨頻り。
遺恨十年志遂げ得ず、
あるが中に我世も何時かふけぬらん。
寂を破る一聲禊開けり。

見れば乳母のひう〳〵と
誰かは知らず庭の面よ
おとあふ人のあればとて、
さゝやくまゝよ身を起し、
庭に下り立ちさしのぞく。
『箱王殿か。』『兄上か。』
夜深けて一人曾我の里、
露にうぼてる衣手に
まづ置き添ゆる白玉の
様子は知らず、兄弟が
年経へて廻り逢坂の

關の清水にあらおくに、
迭に袂しぼりつゝ。
『明日は出家とあらの葉や
このてがしはの二面、
黒の衣を身に着けて
爭で敵のうたるべき
早や箱王も十七歳、
さかりめでたき北條殿
敵をねらふよすがにもと、
みづから髪を取り上げて、
烏帽子打きせ、今宵より
名乗るや五郎時致ぞ。』

勇み立ち出で、十郎の
あとに引き添ひ、静々と
皈る家路の門の樹々。
なれし昔の一間にて
母は見るよりあさましく、
あまりの事に言葉さへ
奥よ立ち入り出でばこそ。
流石に猛き時致も、
不興うく身の是非あくも
すご〳〵出る門の外。
暫時は時を松陰に、
振り回り見つ行く水の

流れと人の身の上は、
實に定めなの世ありける。

其五上

朝には春咲く花の色を誇り
夕には秋の野末の虫と啼く
榮華は夢か、邯鄲の
枕に近き波の音
聞きつゝ伏見大納言、
雲井の庭のそれならぬ
身の行末を大磯に、

忘れがたみを沖の石。
その沖の石うたてくも、
人こそ知らねかはく間は、
渚に世をし立ちつくす
蛋の子ならで、朝な〳〵
濡れそぼちぬる衣手を、
翳すや目元白妙の
雪かとまがふ玉の顔。
名殘の涙貫ける露、
落れば同じ溪川の
底の藻屑とあらばとて、
迭にしぼる袖袂。

末の松山末かけて
かわらじものと思ひきや、
心の色は深草の
しのぶの袖のすり衣、
忘るゝひましあらねども、
敵をねらふ人の身は
明日をも知らぬあだしかげ。
比翼連理のかたらひも
短き夏の宵の夢、
雲のいづこに月宿り、
まだつきやらぬ言の葉も、
きぬ〴〵になる曉の

空に一聲郭公。
胸も思ひかきくれて
鳴くや五月のあやめ草、
あやめもわかぬ戀衣
はるゝきぬる甲斐あらで、
今宵も曙けの烏啼き、
よしあし引の山越て
飯りを送る道三郎。
泣き入る虎をたすけ立ち、
蘆毛の駒にかきのせて、
流石別れの悲しさに、
せめては曾我と中村の

山彦山の峠まで、
つきぬ思ひのかず〳〵を
言ふてかへらぬ別れ路、
立歸り去る袖成が
袖打ち拂ふ後かげ。
木の間がくれに遠地近地の
たつきも知らぬ山の中。
道もさやかに見へわかで、
落る涙は瀧川の
せかれ行くての路の芝。
またの逢ふせを松浦潟
ひれふる山のろれならで、

鞍にひれふしなく〳〵も
家路をさして皈るなる
心のうちの哀れさよ。

下

心あき草木もこぼす枝の露、
月にも歎き花見ても
いたみ易きは孤の
世をはかなめるならひぞも。
垣根に匂ふ卯の花の
苔も落る世の中は、
老少不定の道理を

思ふに憂さのふかみ草、
散りけん様もいたはしや。
『淺間の狩』も、武士の
矢なみつくらふこての上に
霰たばしる那須の狩、
あだに過ぎ行く春秋を、
命生存へ何にせん。
此度裾野の狩くらに
よしや本意は遂げずとも、
再び世には梓弓
ひきてかへさぬ身の上を、
ろれと知りなば母人の

歎きの程ぞ想はるゝ。

只餘所ながらの暇乞』

打連れ門の外面にて

五郎を殘し、祐成は

母の一間に立ち入りつ。

『前代未聞の富士の狩、

裾野の夜風まだ寒し、

武士と生れしめうがよは

母の小袖を賜りて

君の御供』死出の旅。

口には夕露の

消ぬ歎きもや、

思ひ知りてか、知らずにか、

母は心もとけやらで。

『狩と聞くさへいまはしき。

赤澤山の夕時雨

想ひ出すも袖の露。

小袖はさらに惜しからず。』

秋の野もせに生ふ千草

形見の色の色深き

情けを汲みて見る目には、

千々に物こそ悲しけれ。

思ひは同じ母の衣

猶ひとかさね欲しき人、

隔ての障子かいやれば。
あはれ五郎と、胸の裡。
『親と呼ぶ、此母は
十郎ならで子はあらず。
あれは誰ぞや』と石蔓の
又若返る思出も
浮世の義理の辛ければ、
『ゆるさせ給へ母人』と
願へど請へどかひをなみ、
『生きて詮なき五郎をば
首打落し母上に、
いざ見参』と立つ袂、

とる手もたゆく心とけ。
帶もとく〳〵兄弟が
ふるき小袖を殘し置き、
心をあとに門出や、
祝ふて母が杯を
くめどもつきぬ親の恩。
笛聲嚠喨梁の塵飛び、
遺響雲を停めて名殘つきず。
嫋々裊々泣き又慕ふ。
翩々たる扇影あたりを拂ひ、
舞衣風に飄て婆娑と起つ。

一聲吟斷す一世の思ひ出。
『君が代は千代に一たびある塵の、
白雲かゝる山とあるまで。』

とう〳〵と舞ふ袖袂、
其儘、調子踏み替へて。
『別れの殊更悲しきは
親の別れと子の歎き、
夫婦の思ひと兄弟と、
何れをわきて思ふべき。
袖に餘れる忍び音を
返して止むる關もがな。』

嗚呼、返して止むる關もがな。

斯くて我家を立出つ、
鞠子の川を打渡り、
矢立の杉に矢をとめて
行くては何處箱根山。
それぞと餘所の暇乞。
如何よ鬼神なれば迚、
如何よ磐石なれば迚、
何條微塵友切の
惠みの劔二振を、
再び家に飯らじと

神の御社伏し拜み。
三島も過ぎつ、浮島が
原の宿りにつく〳〵と
思ふよ、明日の富士の狩。
さしもに廣き裾野さへ
假の館のみち〳〵て、
風漏る隙もなかりけり。

其六

上

どう〳〵と高嶺を搖る吶喊の聲、
野も山も雲霞の如く人滿ちぬ。

碧蹄蹈みにじり立つ裾野の草。
空を覆ふ白羽の矢、弓滿月。
山雲碎け飛んで馬風を蹴り、
弦に應じて猪鹿山澤よ充つ。
獸鳴人叫九天に震ひ、
足高山上沙烟りに黑し。
將軍之を見て感斜めならず、
威風夏木立を拂ふ五月空。
馬を立る相澤假御所の外。
見渡すに十郎其日の打扮は、
竹笠の裡を匂はす萌黃色、

群千鳥飛び立つ空の直垂着。
騎る駒のやをら夏毛の行縢し、
筈高に負ふ白羽の矢かげには、
ひき添ひて票毛の駒の鞍かさに
立つ勇者○秋毛の行縢はきおしつ、
彼鶴の羽の元白の征矢高く負ひ、
處此處、五郎も共にねらひ行く。

折やよし裾野の嵐颯と分け、
鹿ならで工藤左衛門祐經が
黒駒に白覆綸の鞍置きて、
花やかにあたりも匂ふ狩衣。

引しぼる十三束のなかざしを
時致も、つごふやゆんでめての方
梓弓ひき添ひて馳す椎が本、
何事ぞ鉄馬木を蹴て倒れぬ。
人も身もまゝならぬ世をいかにせん。

彳立天を仰けば殘雲飛べり。
夕風狩やんで陣營や靜。
五月雨の小歇待ち出る郭公、
只一人かほう拙き身をや蹄く。
短衣輕裳しやう〳〵たる裝、
營門の外に彷徨ふ人は誰ぞ。

『天の與へをとらざれば
却て咎めうくとかや。
敵は酒宴催しつ、
心許して臥す館。』
『様子は知れりいざやいざ、
今宵鬱憤はらしなん。』
ふけ行く夜半を待つか間は、
二十餘年の其間
限りも知らぬ母の恩、
生々世々に忘れねど、

下

露もかへさで今此處に
先立ちて行く不孝の身、
言譯くるにはあらねども
『せめて形見の一筆をと。』
一夜の後は中隔つ
彼の世此の世の野邊におく
露より脆き命毛に、
かきつぐ術も涙のみ
よじみて淡き世のゑにし。
『これより曾我へ立飯り
母の行末短夜の

あけて詮なき我等が身。』

『長き年月つかへしも

斯らん時のあればこそ、

冥途の旅も諸共に

剣の山を上るとて、

君を先立てかめ〳〵と

二人なにしに歸るべき。』

若しかなはずばさしちがへ

死なまくする道理の

ありとは知れど、主命を

背かば不興うくる身の、

名は鬼王の目よさへも、

道三郎もとも〳〵に、

なく〳〵曾我へ歸り去る。

夜もかう〳〵とふけ行けば、

今をかぎりと門に出て、

迭よ顔を見をさめの

冥路を照す松明に、

かたそむけ見る目の元を

ほろりと落る一雫。

建久四年の五月闇、

降りみ降らずみ村雲の

末の八日の亥の刻ばかり、

館々を打過ぎて
此處が敵の宿りぞと、
地にぬきあしゝ幾月日
世を忍ぶ身のやう〳〵にて、
内に押し入り見廻せば、
工藤は何處かげもなし。
辻にもやせし篝火も
消てや闇に迷ひぬん。
折しも彼方の妻戸開け、
招く扇のかけ見れば、
畠山家の郎等か、

本田の次郎親經か。
『波にゆらるゝ沖つ舟
しるべの山はこなたぞよ。』
『うことも知らで寄する身の
風をたよりの港入。』
松明翳し押し入れど、
敵はいざや白川の
夜の船路を醉ひ臥して、
夢は何地をめぐるらん。

衣にかし卷き遊び女を
疊の外にかいやりつ、
後と前へよ立つ二人、
見合す顔に悅びの
一世をこぼす片頬笑。

忽ち聞く閨中枕を蹴る音。
闇を切り裂く電光只一閃。
腥き風颯と窓を撲ち
あと松明の影消果てゝ寂。
嗚呼工藤祐經が今生の夢、
殘れるは赤木の柄の刀のみ。

『出逢へや我と思はん人々よ。』
『出逢へや曾我兄弟は此處に在り。』

さは〳〵と吹き捲く雨の音凄く、
きら〳〵と星を亂せる劍影。

篝火も裾野の嵐吹き消しつ、
波うちて亂れ立ちけん軍營も、
風竭めばきれ〴〵に飛ぶ雲間ゆも
亡き魂のかげかと青き星一つ。
空見れば夜はほの〴〵と曙けそめぬ。

（一二）宇治の柴舟

憂きを其身よ積む柴舟よ。
宇治の川瀬よあれ可哀やあ、
焚かぬさきからこがれ行く。

（明治廿四年七月）

（一三）秋の七草

（夢香隊淵百花園にて）

秋を尋ねて來る足元に、
にほひ滾すか藤袴。

人を待乳の朝吹く風を、
見やれ薄が招くわい。

露を汲み出す桔梗の花の
瑠璃の盞手に把りて。

萩の花顔あれ赤らむに、
誰か刈萱憎らしや。

いとし花葉に汝が手ふ觸れそ、
あだし情の露が散る。

（明治廿四年九月）

（一四）薩摩琵琶を聽く

春去り秋は蟬の聲
琵琶の聲さへ澄み行きて、
世をはかなくもかもほゆれ。
げに樂みは夢一夜、
結べば草の庵にて、

とくれば、もとの野原なり。

（明治廿四年十月）

（一五）萩の小枝（花と露）

萩の小枝に袂な觸れそ、
露の玉の緒貫き住めで
うかと宿かる花の上。
萩の小枝に袂な觸れそ、
寄りて置き添ふ露重たげに

見れば赤らむ花の顔。

萩の小枝に袂な觸れそ、
露に撓めるかよわき身には
朝の風さへ厭ふもの。

萩の小枝に袂な觸れそ、
露のなさけのつい根に滾れ
いとし匂ひが餘所に散る。

萩の小枝に袂な觸れそ、
花の車のもし浸むならば
人や咎めん移り香を。

（明治廿四年十月）

（一六）所作淨瑠璃二曲

余一夕平家物語を讀み、『奮き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れよける』といふに至り、衰世の音として、悲み怨む調はあれど、好き詩料あれば、戯に所作淨瑠璃とあしぬ。尋て同調同聲を以て「平薩州」を作れり。

思ふに演劇は美術の粹なり。各美術の美を萃めて

一場に演ずる者なり。其言詞は是れ詩の美。其道工立裝飾は是れ繪畫建築の美。其所作は是れ蹈舞の美。其囃しは是れ音樂の美。

中に所作事あり主として唱歌に依て表情す。寧ろ舞の一種なれども、能の如く古めかしからず。左れども普通の演劇の如く急切ならず。二者の中間に在て、最も優美高尚なる心情を養ふに適す。觀者忽ち春衣春裝落花雪の如き間に立つの思あるべし。泰西のヲペラとかん云へるにも似たらんかし。其從來の作に淫猥見るに堪へ難き者あるは、そは所作事の罪にあらず、詩料を擇ばざるの罪のみ。

而して余が此作に至ては、必ずしも所謂美術の粹

を期したるにあらす。もと是れ一夕の遊戯文字、以て自ら遣れるのみ。其推敲鍛錬を缺くか如きは取り出ゝと言ふまでもなからんとす。

舊都月

登場者

徳大寺左大將實定卿
待宵の小待從
ものかはの藏人
大宮近衛皇后
紅葉局

本舞臺一面に所作舞臺を敷き、上手の方、所作舞

臺の後に家臺を作り、近衛が原大宮の御所、八月十日餘り八日、夜寂に秋荒れたる躰宜しく、下手に至り、少し折曲りて東の小門舊びたるを設け、傍に松の立樹の下秋草をあしらひ、其後の方、遙に惣門の躰を見せ、下手の山臺にて、常盤津連中の出語り、鳴物宜しく有て幕明く。

當百御敷の大宮人よかしづかれ、明し暮させ給ひけん、有様に引替て、今幽かなる御所の態。此淨瑠璃にて、大宮近衛皇后、服裝宜しく、髪はふわりと垂れ、檜扇を持ち、紅葉局待宵の小侍從にかしづかれて立出給ふ。二人の女房、下髪白綾の袷小袖小袿緋の袴等、すべて平家時代宮女の

躰宜しく、傍に燈を置き、又琴琵琶などあり。

當世に時めきし越し方を、簷のしのぶの懷ぶにも、猶餘りある御袂、いとゞ涙の露滋く、雲井の庭も秋深けて、荒れにぞまさる宮の中は、恨み音を鳴く蟲さへも、枯れ〳〵て行く痛しさ。

大宮四邊を見廻はし、昔を戀ふるとおしありて、座褥の上に坐り給ふ。

大宮「喃人々。世は定めなのならひといへど、九重の都の中も斯く荒れては、誰と居待の月を觀ん。

紅葉「こは畏き仰せごと、左れば、源氏の字治の卷に、優婆塞の宮の御女、秋の名殘を惜ませ給ひ、琵琶を調べて夜もすがら、心を澄まし給ひしよ、有明の月の出

でけるを、猶や足らずと思しけん、撥にて招かせ給ひつる、其古を今こゝに、

待宵「せめてもの御慰み、御琵琶なりと、

二人「いさ召されましやふと共々よ、勸め申せば大宮は、御琵

當「召されましやふ。

琶をとり上げて昔を懷ぶ御音じめ、搔き鳴らし搔き鳴らし心を澄ましける。

琵琶を彈きはじむる時、惣門の方にて『御内へ物申さん、御内へ物申さん』と言ふ聲す。人々耳を欹て不審の思入にて、大宮琵琶を彈きさし給ふ。

『御内へ物申さん、御内へ物申さん。』

紅葉「あれ訪るゝものゝあると思し、待宵殿、見てたもらぬか。

待宵「おか〳〵の事、誰やらん訝しや。

當「と、侍從は庭に下り立ちて、彼方此方を打見やり。

侍從庭に下り立てば、紅葉局二重の簾を下す。侍從惣門の方に立寄りて、

待宵「誰ぞや、蓬生の露打拂ふ人もあき處へ。

彼方にて『これは福原より大將殿の御登り候ふ』

といふ。

待宵「何大將殿の、

當「大將殿の御登りと、聞くに嬉しさ待宵が、待ちこがれたる月影を、松の葉越のそれならで、隔つる門の内と外。

待従驚き喜ぶこなし宜しく有て、

待宵惣門は錠のさゝれて候ふぞや、東の小門より入らせ給へ。

『左らば東の小門へ廻り申さん』。

竹「新帝供奉の人々は、福原の秋の徒然を、慰みわづらひ已がじゞ、須磨より明石の浦傳ひ、磯の松風吹冴ゆる住の江難波葦屋の里、月落ちかゝる淡路島、和歌の浦波立かへり、立飯り來る人もあり。尾の上の秋の曙を眺めて飯る人もあり。「中にも徳大寺の左大将實定卿、舊き都の月を戀ひ、此時徳大寺左大将實定の卿、藏人を隨へ花道より立出る（扮装之を略す）。

竹「雀の松原、御影の松、雲井にさらす布引の、瀑布を遙に見渡しつ、星か河邊の螢かと、詠みし昔も懐はれて、戀故命を失ひし、二人の夫が求塚、いなの湊の曙に、霧立籠むる昆陽の松、春にあられぬ山麓の霞む水無瀬の川も過ぎ、男山にすむ月の影、宿るは何處石清水、誰が染め掛けし紅葉の、錦の袂打拂ひ、都に入りて見給ふに、空しき跡のみ多くして、たまゝ殘る門の内、行通ふ人のあらざれば、淺茅が原、蓬が杣と荒れ果てゝ、鳥の臥戸とぞ成りにける。

此淨瑠璃にて、大将藏人と振事あるべし。

竹「大将心を澄まし給ひ、

題詠「霜草欲枯蟲思苦○風枝未定鳥栖難。

侍従門近く出で來り、大將も門の傍に立寄り、互に顔見合せて驚喜するとなしあり、大將突と門内へ入る。

大將侍宵殿か。

侍宵實定卿。

當「實定卿と計りにて、同音あとは言葉も涙のみ、千々の思を語るらん。

二人の振事あり、藏人中に入り二人右左に別る。

大將まづ此由を大宮へ

藏人仰上げて給はれかし。

侍宵左らば、打連れて南庭に伺候申さん。

侍從大將と打連れて、舞臺の央二重の前に來り、

藏人は上手に入る。侍從簾近く寄りて、

侍宵これは福原より大將殿の見へて候ふ。

大將侍從に隨ひ大床に伺候す。此時簾上り紅葉局ハ大宮の傍に侍坐して在り。

大將德大寺實定、只今參上

竹「仕ると、申上ぐれば當「大宮は、いと麗はしき御顔ばせ、

大宮珍らしや實定、これへ〳〵。

當「と仰せある。竹「大將はッとひれ伏して、

大將君在せば、同じ雲井の中なれど、なれぬ宮居は、旅の

空ある心地して、枕に通ふ蟲の聲さへ、物憂かる音を鳴き明し、遙々都の月を懐び、今故里を來て見れば、痛はしや、昔に變る御有樣。

大宮左れば、後庭の春の花、清涼殿の月の宵、霓裳羽衣の曲もなし。

紅葉徒宵變れば變る一同浮世ぢやな。

同音「と、共に悲歎にくれ給ふ。

皆々悲歎の狀宜しく有て、

竹「大將月を打見やり、

大將今さし出る月の影、昔ながらの一曲を、御慰にしらぶべし。

竹「腰より横笛取り出し給へば、同音「左らばと人々立ち上り、當「宮には御琵琶まゐらせつ、「紅葉は琴を、「待宵は、扇を取りて立上る。

これより奏樂侍從の舞とかる。

唄「さゝら形、錦の袂振りはえて、花の吹雪に道も去りあへず、遊び暮らせし春は過ぎ、ゆきあひのまより霜やをく、衣の袖をかたしきて、枕に近き雁の聲、雲井の庭も荒れぬれば、秋の風のみおとづれつ、君に逢ふ夜はたまだれの、小簾を漏れ入る夕月の影。

此唄につれ侍從の舞宜しくあるべし。

同音「斯くてある間に夜も深けぬ、

大將身は御暇たまはるべし。

大宮後會期遙。
紅葉餘りに名殘の惜しけれど、
待從只曉を期すとはいへ、
大將九枝の燈盡ぬるを、奈何ともせんすべなし。
同音「おさらば、さらばと、當「大宮は、紅葉局にかしづかれ、
夜の殿に入り給へば、
大宮紅葉局にかしづかれて立入る。
竹「大將庭に下り立ちて、昔今を懷び給ふ。
今樣「舊き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける。月
の光りはくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。月の
光りはくまなくて、秋風のみぞ身にはしむ。
大將はや曉に程あるまじ、

往宵暫時御別れを惜み申さん。
此より合方になり、二人の振事ある。
同音「まれに逢ひ見る嬉しさは、秋の夜ながら難波江や、
短きあしのふしもせで、明るといひし夏の夜の、其
夏の夜の心地して、まだ昵言のつきなくよ曉告る
鷄の聲。竹「又も住み憂き福原や、新都の月にあくか
れん。當「此方へ舊都に獨り棲み、言問ふ人のありは
せで、明し暮さん徒然は、上陽宮の昔さへ、想ひやら
れて憂れはしや。
この時藏人出で來り、二人の中に入る。
竹「斯くてはつべき事ならねば、
此より三人の振事となり、二人が別を惜むを、藏

人引分くる心入れあるべし。

竹「藏人大將を誘ひて、立出るよは出たれど、同音流石別れの惜しくして、竹行つもどりつ、當のび上り、竹「又ふり回り、立歸り、

振事宜しくある。

大將如何よ藏人、侍從が今朝の名殘の躰、餘りに惜しげに見へつるぞ、今一度立歸り、兎も角もいふて來よ。

藏人かしこまつて候ふ。

竹「と、藏人は取てかへし、『暫時』と侍從が袖引留め、藏人ものかばと、君がいひけん鷄の音の、今朝しもなどか、悲しかるらん。

待宵待たばこそ、深け行く鐘もつらからめ、歸る朝の、鷄

の音ぞ憂き。

同音又もや告る鷄の聲。

藏人立別れて、大將と共に花道に掛る。

同音「さらば〳〵と西東、別れてこそは入よける。

待從舞臺の中央に立て之を見送る。淨瑠璃の切にて、靜に曙染の幕に、秋風殘月を畫きたるを引きつけ、合方にて大將藏人幕外を向よ入る。

平薩州

登場者

薩摩守忠度
若葉の前
乳母蓮
忠度の從者二人

本舞臺一面所作舞臺を敷き、後の方上手に家臺を作り、憂き節繁き竹棟、簷傾き簾舊り、春とはいへど、梢に來啼く鶯ならでは、音なふ人も涙を袖よ漣の滋賀の里、よしある人の隱れ家の躰宜しく、下手に柴折戸半掩ふて、櫻の立樹春已に老なんと欲し、傍に若草をあしらひ、千々の思ひ萠出る彌生半過ぎの光景を見せ、下手の山臺にて常盤津連中出語り、鳴物宜く有て幕明く。

當「ながらへばながらふものか仇し世を、長等の里の片邊り、たゞかりそめのゆかりにて露の此身の置き所、簷のしのぶのしばしが間、忍ぶ

とすれどいつしかに、春の日數も積りては、心の色の萌出る、袖は涙に若葉の前。

此淨瑠璃にて若葉の前平氏時代の扮裝宜しく、乳母漣にかしづかれて立出で、宜しき所に居並ぶ。

若なふ漣、一河の流れを掬ぶさへ他生の緣と聞きつるよ、葉の上よりかしづかれ、斯るわびしき隱家まで宮仕する志、いつの世にかは忘るべき。さはさり乍ら定めあき世のならひ、母上よは死別れ、父上には生別れ、何をあてゞに生存へて、人に憂目を掛くべきぞ。思へば果敢なき身の上じやはやい。

當「と歎き給へば、蓮が
蓮ふ姫様とした事が、又しても御歎き。あの櫻を御
覽じませ、春が來れば見事花が咲きまする。其内
に勅勘も宥り、殿様の御歸洛あるは知れた事、稚
い時から、片時もお側を離れず、お育て申した、大
事の〳〵の姫君様、よい殿御に渡すまで、乳母が
きつと請込んだ。そうくよ〳〵と遊ばして、もし
かわづらひでも出てよいものか。櫻なりとも御
覽じませ、あの美しい事わいの。
當「と、諫められても姫君は、翅痛めし秋の蝶、霜に
息つく風情にて、過ぎこし方を忍ぶれば、花を
見るさへ涙の種、ひらり〳〵と散る花の、共に

散りなん心地して、朝な夕なの起き居よも、た
ゞ母戀し父戀し、思へば身も世も恨めしく、見
渡す外面はうら〳〵と、夕日の渡る鴉の海、磯
よおり立つ蘆田鶴の、雲井に返るよすがとて、
我は泣くより外ぞなき、身の行末を料り兼ね、
そゞろ涙にせきあへず。
若葉の前振事。
當「姫の心を想ひやり、涙は袖よ蓮も、『お道理様
や』と計りにて、おんと詮方ならの葉や、このて
柏のたゞ二人、萎れてころは見えにけれ。
兩人歎き宜しく。
蓮思はず歎きに日の暮るゝも知らぬんだ。燈でも

ともしませふ。まづ奥の間へ、いざ入らせられませう。

若か丶そうじや、蓮かじやと打連れて、奥の一間に入り給ふ。

當「蓮かじやと打連れて、奥の一間に入り給ふ。

雨人退場。

是より竹本の太夫出語となる。

竹「蓮や、滋賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻、色を千年の春によそへ、思を百代の秋に馳す。盛者必衰の世のたとへ、思へば一門の榮華の極み、朝に紅顔を以て市井に誇るも夕に白骨となつて仇し野の露を免れず。生死流轉の海の上、繋がぬ舟の如くにて、身の行末や如何ならん、有爲轉變の世の姿、貫きとめぬ葉末の露、嵐待つ間のならひぞと、流石に猛き武夫も、思ひつゞけて眺れば、花の吹雪に去りあへぬ、滋賀の山越かか〳〵に、狩衣の袖に散る花を、拂ひもやらで薩摩守忠度卿、菅の根の永き春日を日一日、長等の里に狩り暮し、誰が住家とも白雲の、明暮かゝる柴の戸の、漏るゝ灯影を便りにて、それかとも見めたそがれ時、花ある門に音づるゝ。

薩摩守忠度扮装宜しく、騎馬にて從者小平太一人召具し、花道より出で、此の淨瑠璃に振事あり、舞臺の下手柴折戸の所に來る。

小平太柴折戸敲き、

平「御内へ物申さん、〳〵。

『誰人にて渡り候ぞ』。

平「これは行暮れたる旅の者、一夜の宿りを所望致すで御座りませう。

蓮立出で、

蓮「御心易き事ながら、見給ふ通りの賤が屋にて、耻しながら参らすべきものも御座りませぬ。然るべう餘所を御尋ねくださりませ。

忠「其義あらば苦しからず、平に所望。

竹「と仰せある。當蓮はもぢ〳〵と、

蓮「ふ見上げ申せば都人、殊に行暮れて御難義とあ

るからは、御宿参らせたきは山々おがら、何を隱しませう此家は仔細有て女子計り、御痛はしうは存じますれど、御宿はかなひませぬ。

忠「様子を聞けば尤々。然らばこれにて暫時が程、立やすらはん。

竹「と馬より下り、

これにて蓮は顧みながら上手へ、小平太は馬を櫻に繋ぐ。

竹「忠度あたりを見遣り給ひ、

忠「行暮て木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじなるらん。……花や今宵のあるじなるらん。

竹「折返し〳〵てぞ吟じける。

忠度主從立やすらふ。

當「花を今宵のあるじとは、やさしき人の心かな。誰かは知らず知らねども、我も同じき都人、都の空の戀しきに、都の人と聞くからは、籬根に匂ふ花櫻、夜の嵐の吹かば吹け、餘所に見なすはよしなやな。

若葉の前庭に下り立ち振事あり、とゞ柴折戸を半開く。

當「開くる戸ぼそのかげを漏れ、おぼろに匂ふ春の夜の、月も耻ぢろふ御顔ばせ。

春月懸りて櫻花の枝に在り。

若うれに渡らせ給ふは都人にてましますか、花を

主の御言の葉、餘りに懷かしう存じまする。袖振り合ふも過世の約束、いざ〳〵これへ。

忠然れば御免くたさるべし。小平太暫時。

平ハヽかしこまりました。

小平太柴折戸の後ゑ退場。

竹「忠度ゆう〳〵と坐ゑ就き給ひ、

忠度宜しく着坐。

忠いかさまこれはよしある躰、如何なる人にましますゞ、何故の詫住居。我は平家の一門薩摩守忠度、終日花に狩暮し、料らず今宵宿りしも、一樹の蔭のあだならず。包まず語り給へや。

當「と、情の言葉に若葉の前、

若さては聞及ぶ忠度の卿よておはするか。妾ももとは都のもの、隙漏る風も厭ひしが、浮世の秋の木がらしに、親子主従泣き別れ、寄るべも波の捨小舟、雲井を餘所にをちこちの、水の流れと人の身の、行衛も知らず此の里に、假の宿りも水鳥の、嘴ふる露の假りの世の、消ゆる待つ間の果敢い身の上哀れと思ぼし給はれ。

當「と、身を投、伏して泣き沈めは。竹「忠度卿もこと

はりと、共に涙にくれ給ふ。

當「漣は奥より立出で、

漣登場。

漣稀に來ませし都人に、御歎きはよしない事、參らすものはあらずとも、心ばかりの御慰め、一さし舞ふて……な、一さし舞ふて、御目に懸けられませいなあ。

若さあ。

忠如何よも〳〵一さし所望致すで御座ろう。

同音「所望〳〵に是非おくも、當「若葉は庭よりぬ立ちて、櫻の小枝手折り來つ、

若葉の前庭に下り、櫻を手折ること宜しく有て。

當「振り翳しにし花の枝、彌生の空に雪や散るらん。

これより舞となる。

唄「花の木の間を漏る影の、其漏る影の夜な〳〵に、我が衣手に置き添ふる涙の露に宿すゞと、知らでや空にすむ月の、手にも取られず掬ばれもせず。

此の唄につれて若葉の舞宜しく。

同音「掬ばれず手に取られずもあらばあれ、互の胸に結ばふる、思ひは雪の上や下、雨や霰と隔つとも落れば同じ谷川の、みず知らぬ身も過る世に、深きゑよし、あればにや、世に捨て難き心地して、打連れて立つ野邊の雉子、翼並ぶる池の鴛鴦、翳すは雲か舞の袖、曳くは霞か遠山の、裾野よ續く裾袂、霓裳羽衣も餘所ならず。

忠度若葉二人の振事あるべし。

竹「折から驅け來る一人の武士、繋ぎし馬を見るよりも、柴折戸敲いて、

忠度の從者小源太花道より驅け來り、馬を見てこゝしあり、柴折戸を敲く。

源物申さん

竹「とゞ呼はりける。

驚破す霓裳羽衣の曲。

竹「小平太驅け出で、

小平太再び登場。

平兄者人。

源小平太か、我君は此家にゝはするや。御内へ物申

さん。

竹「とゞ呼はれば。

忠あ よそういふうなたは小源太か。

源さん候。

竹「とつゝと入り、兩手をつきて、

小源太柴折戸を入り手をつけば、小平太も

續いてうずくまる。

源早速申上げ奉りまする。今日午の刻關東よりの

注進、伊豆の國蛭が小島の流人左兵衛佐頼朝謀

叛の趣、御一門殘らず六波羅の屋敷へ相詰る段、

速に御歸洛あるべき樣、其儘御跡慕ひまゐらせ、

只今參上の次第此くの如くに御座りまする。

竹「忠度喟然として歎息し給ひ、

忠盛者必衰のことはり、ア、是非に及ばぬ次第じ

やな。これより直に六波羅へ相詰めん。小平太馬

を。

平畏りました。

忠度馬に騎り、兄弟は馬前に引添ふ。若葉主

從送り出づ。

忠前途程遠、馳二思於雁山之暮雲一。後會期遙、霑二纓於鴻

臚之曉涙一。といへる朗詠も、今身の上に知られた

り。

若逢ふは別れの始めといへど。

連これはあんまり曲がない。

源お聞きやる通りの次第かれば。
平是非ない事になりました。
患人々無事で。
若連お さらば。
皆々さらば。
同音「さらば〳〵の聲計り、おし明け方の春の月、花の梢に殘りけり。
若葉主從舞臺の中頃に立ちて見送る。淨瑠璃の切にて、かばろ染の幕に春月櫻花を畫きたるを靜に引付け、相方にて忠度主從幕の外を向に入る。

(一七) 雨中の花

春の夜の簷の玉水たへ〳〵に、碎けて千々の物思ひ。不圖した感冒の心地より、一日二日を隔てなば、癒やすらんと、露草の、假りの枕のかりそめよ、臥しあらひにし褄には、何時しか月日數積り、いや重り行く小夜衣、衣の文も目に倦きて、せんすべをあみ宵々に、乳母が御伽の世の噂、春の彌生の花の袖、朧に匂ふ時來なば、看花の伴い誰や彼、妾は彼の衣此の衣と、心よもなき擇り好み、なせしも此身を慰め

の、爲めと知らぬよわらねども、嬉しく待ちし花の顔、昨日今日とはおりなながら、身は露霜の起きも得ず、睡られもせで臥すにつけ、頸にこぼるゝ鬢髪の、亂れて物を思ひつゝ、春の夜なれどいと永く、廊下傳ひに響くなる、時計のきしりほと〳〵と、深け行くまゝに音高み、冴え行くまゝよ骨よしみ、一刻ごとに命をば、縮め行くかと物悲し。

平常は綿より軟かき、絹の褄も久方の、空飛ぶ鳥の羽に散る、雲かと輕きかいまきも、今宵は石か鉄の、板かと堅くつらゝあす、氷の床と思ふまで、身は冷ゑ渡り足腰も、細き頸の骨々も、碎くる如き思ひして、寢ね返りたく欲りせども、衰へ果てし此身には、

起き上りなんやうも無し。

四圍を見れば枕邊に、打臥す乳母が姿さへ、あがの看護に疲れけん、物寂しげに寢入りつゝ、すや〳〵通ふ呼吸の音の、辛げに見ゆる痛はしさ。まだ春の夜の肌寒き、憂寢の床の假枕、晝の衣も解きはせで、年ごろ盡す辛勞は、皆我が爲のまことかや。覺束あげに假寢して、夢は那地を迷ふらん、感冒ばしひきてたもるなよ。

心も骨も細り行く、洋燈の影暗くして、あれにし閨の裡ながら、常にもあらぬこのけはい、若しや此の世と怖ろしき、彼の世と通ふ其道に、程近きにはあらぬかも。名さへ冥路と聞くからは、足元照す光さ

へ、有るやあらずや覺束なし。熱海箱根の夏の暮、乳母につれられ父母の、傍にかしづき居ながらも、彼方の山路眺望ては、黄昏歸る旅の人、寂しからめと思ひしを、これは見もせぬ死出の山、一人たどりて何處にか、さまよひ出んことと悲し。六道の辻三途の川、弘誓の舟の渡し守、おさけを知らぬ者ならは、誰に行くてを問ひなまし。焦熱地獄阿鼻地獄、八寒地獄若しあらば、一目見るさへ消え入らん。彼處も此處も午頭馬頭の、異形異類の群の中、乳母さへつれず只一人、行きかふことのあるべしや。極樂淨土に花降りて、長閑けき蓮の其臺、あらずば如何に身はなるが中にも胸せまり、次第に呼吸も苦しく

て、引き入れらるゝ心地あり。若し此儘、よ死ぬならば、いとし父上母人の、面ざしさへも忘れ果て、彼の世に行きて悔やせん。若し此儘よ死ぬならば、乳母がなげきも思はるゝ。況してや去年の花の宴、ほの見し人に逢ふことも、これよりながく絶えやせめ。せめてゝ乳母に一聲の、永き訣別を告げまゝ欲し。喚んとすれど聲立たず搖らんとすれど手ゝ出でず。身は櫻木の花苔、盛りの春よ逢ひもせで、あだに散りなん憂れはしさ。

暫時夜明を松の間の、天井よ映る洋燈の、影は常盤の色あらで、淡墨色よ見ゆる環の、眼かと見へ耳と見へ、口かと見れば口かとも、人の顔とも思はれて、

次第に遠み又近み、立る姿のほの暗く、人かあらぬか分ね共、あり〳〵見ゆる姿あり。見れば氣高き其の姿、玉の肌のすきとほり、羅綾のもすそ影曳けり。其の唇の蒼白さ。其の眼の色の淺黒さ。これが彼の世の女王かや、これが冥路のつかさかや、あゝ怖ろしき死の神よ。

氷と見へて冷え渡り、綿かと見へて軟かき、其の生白き手をのべて、いまはの人の魂を、誘ひ去るかや汝が郷に。そよとの音も立てはせで、無常の風の隙間漏る、汝が住家に誘ふかや。其の細長き汝が指、我が手をとらば何とせん。其の細長き汝が腕、我にまとはゞ何とせん。

嬉し時計の響く音、二つ三つ四つ四つ響き、夜明くる頃も近づきぬ。辛く聞つる曙鳥、塒離るゝ聲さへも、今宵はかりは待たるなり。憂しと見し夜の東雲の、光りも窓を漏れよかし。五更の鐘も鳴れよかし。」

墨田川原の夏の宵、短かきあしのふしの間も、月面白き涼み舟、忍が岡の春の暮、長き日影をあかなくに、花の吹雪よ袖はらひ、遊びくらしゝ夢は覺め、昨日よかはる此姿、やつれはてにしいまゝには、花の衣も何にせん。飛鳥の川の明日の日も、はかり知られぬ今の身の、去年を懐ぶの花簪、戀しき人の形見さへ、何時しか色も褪せにけん。散り敷く花の木の下に、年の端積る雪ならで、それかとも見め鬢髪の、

ながき恨のかず〳〵は、又見ぬ夢と消なば消よ、春の山風吹き絶たじ。

夜半の嵐の誘ひなば、千年の戀も無常なり。三寸喉の息絶えて、功名富貴何にせん。あだしの野の邊よ置く露は、朝な〳〵に數添へつ、鳥邊の山よ立つ烟、宵々風の吹きかへて、誰に思ひの塵くらん、立てど立てども盡きやらず。

思へばおがき今宵かな、まだ東雲の色もなし。

覺めつ睡りつ夜もすがら、うつら〳〵となるにつけ、又死の神の姿見へ、白く乾きし唇、の冷かに笑む物凄さ。肩にかゝりしその腕の、有るか無きかと輕けれど、引きしめらるゝ心地して、あせれど逃んや

うはなし。我が手なとりそ死の神よ。汝が姿は氣高くも、我れ只管怖ろしゝ。汝れやさしく誘へども、心の底の計られず。我は此世に生存へて、よし憂きふしのあらばとて、汝が住家の極樂の、花の褥や蓮の床、永劫不驚の眠りより、苦しき忍土ぞ慕はしき。定めなき世に定めある、命にしあれど我は猶、死を怖ろしと思ふなり。

其手なとりそ接吻なせそ、汝が唇の冷たさは、此の世の人と思はれず。汝が唇の軟滑かさ、呼吸は無きかと淡けれど、骨を吸はるゝ心地なり。我魂も今の間に、吸去らるゝか恨めしや。

手を放しなば底知れぬ、淵に落ちゐん放さずば、冥

路の旅よつれられん、死ぬが眠むるに似もやらば、夢みる如きことありて、憂きめを見んも料れず。此儘落ちて此淵の、底は地獄か怖ろしき、鰐魚龍蛇の捜む洞か、石にあたらば我が四躰、碎け散りなんそれも憂し。見れど見れども底深く、雲か烟か見へ分かで、おどろ〳〵に響く瀑布、虚空を渡る星の影、大地の底に獅子たけり、空洞につむじ風激し、吼るか啼くか私語くか、人の聲かとよく聽けば、遠き彼方の山かげよ、ほのかに我名呼ひけり。

× × × × × ×

眼を見開けば山もなく、谿に響きし音もなし。氣をたしかにと言ふ聲の、嬉しや乳母か母か、人か、父の君

さへまし〳〵て、我をいたはり給ふかや。夢かあらぬか身の上を、心静に思ふにも、胸に波うつ動悸さへ、野邊の送りの奏樂の、音かとばかり思ハるゝかも。

（明治二十五年四月）

（一〇〇）雜詠十九首

こは明治廿年頃より廿五年冬までの作を摘錄したるもの。中一二首は明治十六七年頃のものをも含む。

新年曉鴉

村鴉ねぐらはなるゝ聲す也、
翅よ年や立初むるらん。

晴天鶴

舞ふ田鶴のつばさも見へずなりに鳧、
雲井やいかにのどけからまし。
天の原ふりさけ見れば久方の、
雲井はるかよ田鶴鳴き渡る。

春風

梓弓春の山風心あらば、
心して吹け花の木の下。

水上の山吹

川水の底にも花の柵を、
春かけて咲く井手の山吹。
山吹の花のしがらみせきあへず、
蛙あくなう玉川の里。

逸題

露しげき野邊の若草分けつまば、
あやなく人の袖やぬれなむ。

緑樹

白砂の花の梢も惜しけれど、
又めづらしき若緑り哉。
若緑りめでにし庭も夕月夜、
小暗きまでに夏深みけり。

水聲（山陽の詩の心をよめる）

秋の夜の雨かと見れば月影の、
碎けて落つる溪川の水。

擣衣

秋の夜のふけ行く風の遠み近み、
音たへ〳〵に衣うつ也。
夜を寒みねさめて聞けば月影の、
音高く低く衣うつあり。

萩花露

秋萩の花の匂ひもこぼるまで、
上葉下葉に置ける白露。

梅

梓弓春の山邊を吹く風の、
かほりにしるき梅の初花。

我宿にうつして植ん梅の花、
千代のかほりの身にしむるかと。

觀花

かんざしに蝶よと見れば落花かな。
つまづいてこれは〳〵とばかり花の山。

柳上月

青柳の鬢の小櫛か三日の月。

唐詩の意を詠める

枝の鶯搖り起こし、

夜明の曲な歌はせそ。
夜明の曲の聞こゑなば、
たへて久しき我か夫に
逢坂山の逢ふ夜半の
夢も見果てず覺むべきに。

(一九) 秋思七首

玉章をかくると聞けば初雁の、
秋の來るさへ待たれつる哉。
雁かねの渡るも床し啼くねさへ、

秋の野の千草の色のいろ〳〵に、
君が聞きけむ聲と思へば。

天雪のよそにも人をしのぶ哉、
君ゆえ物を思ふころ哉。

秋の夜の小雨降る日のつれ〴〵のころ。
もの思ふ人ゝ何と聞くらむ。

君がいまし家居し方を過き來にし、
玉鉾の厂の行衛のしのばるゝ哉。

通ふ道ゝよしさは隔つとも、
心はへだてさらなむ。

（明治廿六年秋の作に保る）

（三〇）旭日旗

仰けば高し不盡の山。
望めば清し琵琶の湖。
耻ある國の勇士よ、
朝日の國旗振りはえて、
指し翳せ！太平洋の北の天。

芳野の山の櫻花。
龍田御室のはゞ紅葉。

耻ある國の勇士よ、
朝日の國旗振りはえて、
翻せ！亞細亞大洲の磯風。

（明治廿七年七月）

（二）戰塲の新年

新玉の年は立ちけり、　益荒雄が
戎衣の袂かた敷て
夢は故國を繞るなる

旅順の城の其上に、
仇浪高き渤海の
千里の磯洄壓しつゝ。
茜さすが日の國旗、
大陸の空に翳しつゝ。

新玉の年は立ちけり、　益荒雄が
戈を枕に假寢の
蓆に旅雁の聲近き
滿州の野の其上よ、
朔風咲き落す窮北の

皚々たる深雪照しつゝ。
茜さすかは日の國旗、
胡國の天に靡かせつ。

新玉の年い立ちけり、日の本の
國の光を輝かし
東方世界を照すべき、
其新玉の年の端の
劍の上に世は立てり。
其新玉の年の端の
劍の上に我は立てり。

(二二) 祖先の血

(明治廿八年一月)

大蒼原
見渡すかぎり茫々と
み空にまがふ水の色。
山かと見れば雲の峯、
雲かと見れば浪の花、
出る日影も入る月の
影も狹霧にうづもれて、

はてしも知らぬたゞ中を、
葦の枯葉の一葉舟、
萬里の波濤を開拓し、
西も東も白雲の
八重の潮路を越來つゝ、
天つ日影のうらゝかに
豊さかのぼる葦原や
大和島根に國居しゝ、
猛き祖先の活ける血ゝ。
傳へ〳〵て今も猶、
我等が胸に躍るあり。
四千餘萬の同胞が

胸に勇氣を皷するなり。

山行かは

草むす屍、海行かば
水づく屍も、世の憂さの
ものゝかずとは白眞弓
手に取り佩きて、ことさへぐ
高麗の荒野に旅寢しつ、
戈とり持ちて、拷衾
新羅の山邊狩りくらし、
鴨綠江はさかしまに
流れ行くとも、出る日は

東の空に沈むとも、
大和島根に寄する波
代々のみつぎの浮寶
絶たましものと、異人を
討ちまつろはせ靡かせし、
猛き祖先の活ける血は、
傳へて今も猶、
我等が胸に躍るあり。
四千餘萬の同胞が
胸に勇氣を鼓するなり。

風黑き

玄海灘を蹴め來て、
仇浪高く打寄せし、
蒙古のつはもの十萬騎、
艨艟巨艦に取り乘りて、
みそらに海に滿ちしし、
雲霞の如き大敵も、
假りの一夜の島宿り、
筑紫の浦の浦波の
返しもやらずつかの間に、
底の水屑と沈めにき、
猛き祖先の活ける血は、
傳へて今も猶、

我等が胸に躍るなり。
四千餘萬の同胞が
胸に勇氣を鼓するなり。

はやち風
千里の秋を吹き捲くる
支那海上の北南
我物顔に占領し、
吹き荒みぬる潮風に
八幡の國旗翻し、
亞細亞大洲の浦々を
摩しつゝ南遲羅呂宋

印度の海に乘り出でつ、
東大洋の海王と
世におゞろしく轟きし、
猛き祖先の活ける血は、
傳へ〳〵て今も猶、
我等が胸に躍るなり。
四千餘萬の同胞が
胸に勇氣を鼓するあり。

天寒き
蔚山城の雪の暮。
碧蹄關の雨の朝。

彼處も此處も武者鞋
踏みにじりにし八道の
草木も戰ぐ矢叫びの音高く、
其矢叫びの音高く、
四百餘州に震ひにき、
文祿の日の遠征も、
圖南の鵬翼振はんと
謀りしことも、或は又
孤客萬里の旅衣、
羅馬の都城に使しつ、
不朽の譽れとゞめにき、
猛き祖先の活ける血ゐ、

傳へ〳〵て今も猶、
我等が胸に躍るなり。
四千餘萬の同胞が
胸に勇氣を皷するなり。

（明治廿八年一月）

（二三）支那海上の軍艦

日又日、水まん〳〵たる海の上、
見れど〳〵も山も見ず。
夜又夜、浮き沈みやる艦の中、

夢驚かぬ夜半もなし。

潮風寒き朝ぬ〳〵、
故國の天を眺めては、
墨田川原の秋の月、
芳野初瀬の花紅葉、
憶ひ出でぬにあらねども、

寢覺淋しき宵々に、
過ぎこしかたを懷びては、
年波高き二尊、
門に送りし妻や子を、

憶ひ出でぬにあらねども、

東海の波に洗ひて潔き、
芙蓉峯頭千秋の
雪よ操をたぐへつゝ、

春の風秋の月の夜澄み渡り、
眺め清けき琵琶の湖、
其風光にくらべつゝ、

日本男兒の名に耻ぢて、
張りつめし氷の海を打碎き、
旦に窺ふ渤海の水底。

波を捲く千里の風を劈きて、
夕に廻る日南萬里の天。

見渡せば、山を蹙めて寄する波、
水や空、空や水なる蒼海は、
はてしなき南極の雲に連れり。
試に大陸の岸を摩すれば、
芳はしき烟立つてふ茶の國は、
茫々と北斗以南に横はる。

よしさらば、マニラの麻を絢ひて、
軍艦、白河の口に繫ぎつゝ、

且つ春雪を煮て七椀を喫まん。
天を家となし、海を茵となし、
坤輿茫々去る處に任さば、
五洲那處か墳墓の山なからん。

（此の編及び下二編は明治廿七年中の作にして、廿八年一月民友社發兌「支那征伐」に收めたるものに係る。）

（二〇四）黄海の驚波

鐵艦夕べに發す大同江。
艨艟朝に到る海洋島。

漂渺たる雲烟霽れて敵あり、
鎮遠定遠遠山の如く來る。

ふり返り我が檣上の旗見れば、
朝日さす茜の色も鮮かに、
艦列飛ぶが如く一條長し。
爆然礮動く敵艦の彼方、
巨丸海を射て海翻へり立つ。

旗艦令すらく礮門を開けよ。
萬雷齊しく裂けて天柱折れ、
洪濤蹙み來て坤軸傾く。

須臾くして硝烟霽れ又曇り、
滿艦血を帶んで紅淋漓。

見渡せば、み空を焦す黑烟、
彼處此處、敵の艦より捲き上る。
何物ぞ猛然圍を衝て去るは。
追擊轟沈す幾個の堅艦。
紅の雲は四天を飛びめぐり、
夕つ空、世の終かと物凄し。

波はどう〳〵と寄せ、風はぼう〳〵、
滿天の夜の色海原に落つ。

海霧を縫ふて飛ぶ星あかり。
天明けて渤海の口を摩し來る。
歸來海洋島畔を過れば、
水天一髪滿州に連り、
血戰の名殘の潮か波高し。

(二五) 鴨綠江上の野營

其一

限りなき韓山行て盡なんとす、

壯士暮に宿す義州城の外。
殺氣天を衝て慘たる秋の夜。
霜は征衣に滿ちて凛たる劍芒。
軍中復た傳令の聲を聞かず、
唯鴨綠江の水濺々を聞く。

獨り營門に倚て夜を守れば、
天の河黃海の江に横はる。
首を回せば京城那處に在りや。
首を回せば平壤那處に在りや。
顧ふ、出師命ありて宇品を出で、

壇の浦の水、赤間が關の雲、
天風黑き玄界灘の波濤、
白砂白き北九州の磯風、
いづれか是れ敵國降伏の額。
いづれか是れ豊公名護屋の陣。

ふりし昔を今こゝに、
誰かそれぞと白波の
海又海を越來つゝ、
釜山の浦の夕景色、
大同の江の朝ながめ、
名殘は今もつきせねど、

銃とりもちてまするをが
北京を指して急ぐある
矢竹心は止まらず。

尾の上の霧にわけ迷ふ
山又山を打渡り、
龍山營の夏の雨、
平壤城の秋の風、
名殘は今もつきせねど、
太刀とりはきてまするをが
四百餘州に向ふある
矢竹心は止まらず。

其二

限りあき韓山行て盡なんとす、
壯士暮に宿す鴨綠江の岸。
殺氣天を衝て慘たる秋の夜。
霜は征衣に滿ちて凛たる劍芒。
軍中復た傳令の聲を聞かず、
唯轡の音の蕭々たるを聞く。

馬を營門に立てゝ敵を窺へば、
天の河遼東の野に横はる。
首を擧ぐれば奉天那處に在りや。

首を擧ぐれば北京那處に在りや。

顧ふ、出師命ありて宇品を出で、
檀の浦の水、赤間が開の雲、
天風黑き玄界灘の波濤、
白砂白き北九州の磯風、
いづれか是れ敵國降伏の額。
いづれか是れ豐公名護屋の陣。

ふりし昔を今こゝに、
誰かそれぞと白波の
海又海を越來つゝ、

釜山の浦の夕景色
大同の江の朝ながめ、
名殘は今もつきせねど、
太刀とり佩きてますらをが
四百餘州に向ふなる
矢竹心は止まらず。

尾の上の霧にわけ迷ふ
山又山を打渡り、
龍山營の夏の雨、
平壤城の秋の風、
名殘は今もつきせねど、

銃とりもちてますらをが
北京を指して急ぐなる
矢竹心は止まらず。

(二六) 春雨

新郎

絲より細き春雨の
柳の枝よ灑げるは、
かの婚禮の其宵に、

汝か綠の髪の上へを
雲かと掛けし被衣かも。

今を春邊と匂ひ出で
露に惱める花の枝、
かの婚禮の其宵に、
輝く・場に嬌羞らひき
汝が姿に似たるかな。

新婦

花の車の且つ落ちて
濡るゝ翅をしばたゝき

妙に囀る鶯ゝ、
君が嗜める一曲を
歌ふ聲にもまがふかな。

色さへ深き花の蔭
春の簷端を滴りて
稀に音する玉水は、
神の小琴の音に通ふ
君が樂しき呟きか。

新郎

實に趣味多き春雨よ、

新婦

汝は平和の使かも。
汝がしめやかに降る里の
春の心のおだやかさ、
閑寂き底に至樂あり。

斯る中も過ぎ易き
春の光り惜しければ、
いざ諸共よ打連れて
飽くまで花の香に醉はむ、
よし衣手は濡るゝとも。

君と手を取り立ち出でゝ
雨中の春を眺れば、
小枝を搖り飛ぶ鳥の
羽風に露のこぼれつゝ
我が袖は濕ひぬ。

花の雫の滴りて
袂にかゝる嬉しさを
包みも敢へず思ふかな、
同じ木陰を降る雨に
昔は涙添へにしを。

斯くも樂しき春雨に、
獨り旅亭の窓に倚り
故國の天を眺めてゐ、
征衣の袖に降りかゝる
涙を拂ふ人あらむ。

斯くも樂しき春雨に、
いとをし妻を先立てゝ
又咲く花に物思ひ、
一枝の春を折り持ちつ
墓邊を廻る人あらむ。

又或るものは花の香の
うつろひ易き色を見て、
我が世の春を惜みつゝ、
夕かけて降る春雨に
みそかに袂しぼるらむ。

又或るものは幾春を
遠き旅路に夫を置き、
空しき閨に唯一人
過きこし夢を繰返し、
花に涙を濺ぐらむ。

（二七）戀

花園に咲ける花あくば、
何を天地の色にせむ。
碧空に匂ふ星あくば、
何を宇宙の光りぞや。
我が人寰に戀すてふ
心しなくば、人の世を
無窮に繋ぐかた絲の
情けの生命あるべしや。
怪む勿れ我が戀の
世よ測られぬ微妙さを。
天地の鍵も戀ゆに
開く慣ひと知れや君。
訝る勿れ我が戀の
世にもあやしき通力を。
神の秘密も戀なれば
覗かん方便のあらずやは。

（明治廿一年四月）

實にも微妙き我が戀よ。
汝が喜びに輝ける
愛の滴るまなじりに、
大地を洗ふ雫あり。

實に測られぬ我が戀よ。
汝が愁の眉の根に、
おし明け方の春の月
長天を低るゝ力あり。

汝が一たび笑む時は、
霜枯れ果てし冬の日も、

梢に春の花發き、
野邊は胡蝶の飛び廻る。

汝が一たび悲めば、
世は麗けき春ながら、
花に涙の露重く、
月に愁の霧深し。

汝が一たび樂めば、
いさゝ小川の流れさへ、
花咲く野邊を分け行きて
樂しき樂譜を呟かむ。

汝が一たび怒りなば、
晴れたる空も搔曇り、
世におどろしき霹靂
山嶽共よ碎けあむ。

よしや五百重の海の波
我が世を遠く隔つとも
よしや千里の雲の峯
我が世を高く遮るも。

春の夕に立迷ふ
雲の袂の風輕き

思の翅搏ちつゝ、
汝が通はぬ空もなし。

（明治三十一年四月）

熱天爍地の砂漠も、
鳥も通はぬ窮北の
氷に鎖す海原も、
汝は容易に翔るかな。

（二八）草雲田崎翁を挽す

本日は故草雲先生御葬儀御擧行との御事、悼惜何

ぶ堪へん。一篇の蕪詞聊か追慕の意を致し申候。敬具。

明治卅一年十月二日　　塚越芳太郎

田崎草雲先生御遺族様

朝な夕なに眺めにし
脱俗きさまを、今よりは
望むにすべやあらさらん。
富士の高嶺の白雲は、
君が繪筆の漂渺と
碧空遙けく懸るとも。

朝な夕なに杖曳きし
脱俗き影を、今よりは
仰ぐにすべやあらざらん。
蓮臺山の秋は來て、
君が繪筆よまがふまで
もみぢの錦はゆるとも。

左は去りながら、人の世の
浮世の空の村時雨、
つひには濡れぬ袖もなし。
ひとり今日のみ泣くべしや。

貴將相を兼ぬるとも、
しかばね地下よ朽せぬに
名は青苔に埋むあり。
富侯王を凌ぐとも、
榮華い邯鄲枕上の
一夜の夢と消ゆるあり。

時劫をめぐる水車
めぐれど尽くる際限なきは、
世に天才の命のみ。
蓮臺山の秋の色
匂はんかぎり、白妙の

富士の高嶺の白雲の
懸らんかぎり君の名は
傳へ〳〵て尽くる世あらじ。

(二九) 新年

奇しき宇宙の機關の
上より見れば「土塊」の
瞬の間の一廻轉、
よしや意味あき事にせよ。

無邊無極の「時」の環の
廻り終ふべき際涯もなく、
廻り始むる端緒とても
あるべき筈のなきにせよ、

四時の代序徳たず
春去り秋は呉竹の
千代も同じき「歳月」の
繰返し來る迄にせよ。
人生五十年間の
浮世の旅の行く末の
黄泉の坂の一宿り、

假に結べる夢にせよ、

年の端毎に降る雪の
緑の髪に散りかゝり、
積れば遂に白妙の
「老」の色添ふ原因にせよ、

昨日に同じ夜は明け、
明日に變らぬ日は出でつ、
仰げば天空俯せば土地
同じ色なる今日にせよ、

年の始めと聞くからに、
何かは知らず我ながら、
新まりぬる思ひあり。
事珍らしき心地せり。

浮世の路の山坂の
羊腸なる嶮岨きに、
よろぼひ上る苦しさも、
「今日」の一日は忘れつゝ。

嵐烈しき人生の
命運の海を漕ぐ舟の、

寄るべをあやみの危さも、
「今日」の一日は忘れつゝ。

昨日の罪悪も、悔恨も、
一歳積る愁悲も、
怨みも共に忘れつゝ
「今日」の一日は忘れつゝ。

何かは知らず我ながら、
精、神形體も新まり、
同じ日影も麗はしく
昨日に變る思ひなり。

山も「斯の日」の靜さは、
太古に似たる眺めあり。
人の心も長閑くて、
神代の事の懷ばれつ。

不盡の高嶺よ茜さす
朝日の影を今朝見れば、
天地の開闢かと思はれて、
「希望」の照れる心地あり。

賤か門邊に樹つ松の
小枝に來鳴く雀さへ、

「千代」と呼ふと聞ゆなり。
只樂しげに見ゆるなり。

碧空遙けく紙鳶
飛ばす未來の國民の
命運は、高く久方の
雲井を翔る姿あり。

巷に乙女打群れて
搗く追羽子の飛びかふは、
春の野もせに蝶〳〵の
むつれ戯むる如くなり。

於戯！「新年」よ。「新年」よ。
汝は如何なる神なれば、
斯る不思議の力もて
汚れし人のみそぎしつ、
再た新らしき「生命」をば
永く斯の世に與ふらん。

只此の上は人も我も、
斯の「革新」の時〳〵に
咲き出る梅の花よ撒布る
新しき香を身に占めん。

「稚子」の日に復活れかし、
「希望」の昔に復活れかし。
新しき香を身に占めて、
「自然」の故郷を憶へかし。

（明治三十二年六月）

（三〇）田家烟

（明治第卅二年元旦）

見わたせば、
しづかのき端の
あさけぶり、

今朝はかすみに
立ちまがひつゝ。

花晨月夕　畢

明治卅二年八月十五日印刷
明治卅二年八月十八日發行

定價卅七錢

發行兼編輯者　塚越恒子　東京市麻布區市兵衛町二丁目四十七番地
印刷者　石嶋良三郎　群馬縣前橋市曲輪町百四番地
印刷所　秀巧舍　群馬縣前橋市連雀町六番地

頁數	行數	誤	正
四	三	破。	碎。
二二	八	泡洙。	泡沫。
三四	一一	哀。	哀。
六三	五	黒。	墨。
六五	三	其五上。	上は別行
六八	三	鳴く。	鳴く。
七〇	一〇	落の假名おちる。	おつ。
七二	一二	歡き。	歎き。
七三	五	出の假名いで。	いだ。
七九	五	鳴。	鳴。
八〇	四	票。	栗。
八一	一〇	蹄。	啼。

頁數	行數	誤	正
八三	四	」。	をとの間に入る。
八四	一〇	主命の假名は	しうめいなり
八八	二	外の假名	ほか。
九〇	四	宇治。	宇治。
九〇	八	夢香隊洲。	夢香洲。
九五	四	奮。	舊。
九八			舊都月以下は總て一字宛下げること
九九	四	鳴。	鳴。
仝	一〇	字治。	宇治。
仝	八、十	丁。	徳。
一〇〇	三、四、二、三	丁。	徳。

二〇	八	戸の字	一字下げる
二五	六		一字上る
二八	一二		明治廿五年三月を脱す
一四二	四	若緑	若緑
一四六	四	雪	雲
仝	六	鳴	鳴
仝	一二	保る	係る
一四九	一二	咲き	吹き
一五一	二	大蒼原	大蒼海
一六四	一	漂渺	縹渺
一七〇	三	鴨線江	鴨緑江
一七六	七	光りて	光りし
一八二			初に一行あく

一八四			仝 上
一八五		明治云云の一行は	汝は容易の次に入る
一八六	九	漂渺	縹渺
一八八	四	候	候
一九〇		人生云云の前	一行あく
一九三	六	つゝの下に	一線を入る
一九四			初に一行あく
一九七	五	六月	一月
仝	七	卅二年	年ゝ徳

佐々木書店